

## 堀辰雄の漫画脳

・・・自分のことを書くのは最期でいいんだよ！・・・

なかはら かぜ

漫画家になってすぐの頃、編集長から言われたこの言葉がとても印象に残っています。

それに続けて編集長はこう言ったのです。

「自分の体験は本物だから、誰が書いても読者は感動するんだよ」

私小説を真っ向から否定する言葉です。

否、なかはらが描いていたのは漫画ですから、正確には、

「漫画家は自分の経験を切り売りして、人を感動させてはいけないのだ。それは、本当に作家として、描けなくなった最期の時まで取っておかなければならないのだよ。だって、自分だけのリアルなドキュメンタリーは誰だって感動するのだから。それよりは、何もないところから物語をつくりだす能力を伸ばさなければならぬだろう」

と、まあそんな意味であろうと思うのです。

確かに、私小説は誰もが感動するものです。自分とは違う人生を垣間見て、このような生き方があるのかと、自分の人生と照らし合わせて、自分の人生はこれよりは良いかと安心したり、自分もこんな人生をおくりたかったと羨ましがったり、と一喜一憂するものであるようです。

小説家にしても、また漫画家にしても、本当に作家がどこまで自分の人生や生活に忠実に物語を紡いでいるか、言いかえれば、切れ売りしているか、正確なところでは本人にしかわからないのではないのでしょうか。

本当に作家は何もないところから創作をしているのでしょうか？そのような作業が出来るのでしょうか？真っ白な原稿用紙や画用紙のうえに、創作だけで新しいものを構築出来るのでしょうか？私は不可能だと思っています。

創作活動とは「経験」「体験」「影響」「想像」「再構成」などが混沌として混ざり合い「作家の世界」を創っていくものだと思うのです。つまり編集長の言うように、簡単にフィクション、ノンフィクションと創作活動はふたつには分けられないのです。

確かに経験値の高さは、創作能力の幅広さに比例するとは思いますが、ドラマチックな人生を経験した人がすべて作家的能力を有するかと言えば、それは言い過ぎでしょう。昔は苦勞をした分だけ人間的に成長する、それは創作活動にも大いに活かされる、といった芸の肥やし教的教訓を述べる風潮もありました。それも間違いではないでしょう。しかし、それはどうでしょうか？これだけ苦勞してきたのだから、それをわかってくださいという作家性は本物でしょうか？

つまりたとえば自分を例にすれば、「生活者なかはらかぜ」が「作家なかはらかぜ」と同一人物で良いのだろうか？という疑問です。生活者なかはらかぜの人生が、作家なかはらかぜを創り出しているのは当然ですが、生活者なかはらかぜと作家なかはらかぜは、実は切り離されていなければならないと思うのです。

どうも表現が迷走しそうなので、一度整理してみましょう。

ひとつの作品「作品A」を想定しましょう。そこには「主人公A」が登場します。その「主人公A」のことを語る「進行役A」が物語を解説しながらすすめていきます。しかし「作品A」は「生活者A」の経験を元に、「作家A」が書いていることになります。このようにまとめても少々複雑な感じがしますが、ひとつの作品には自分の分身が4人いて、巧みにバランスを取っているとと言えるのです。

「Aは彼女に今日こそ愛を告白しようと心に決めていた」

この文章の「主人公A」が愛の告白を決意していることを教えてくれているのは、この物語を解説ナレーションしてくれている「進行役A」です。

そして「進行役A」が「主人公A」が愛の告白をするのだと、読者に教えてくれているという、この設定を考えたのは「作家A」であるわけです。

ただ「作家A」にそのような設定を発想させたのは「生活者A」が自分の現実の恋愛経験を下敷きとして「作家A」に書かさせているとも言えるのです。

ひとりの作家が書いている限り、この4人のAはすべて同一人物であるわけですが、けっして交わることのない、まさにひとり4役であるわけですね。

私小説がもしダイレクトに自分の人生を切り売りしているとするれば、このような役割分担はなく、「生活者A」はイコール「主人公A」となり、現実の経験がそのまま文章にドキュメンタリーされます。そして私小説は人気のあるジャンルでもあります。また、荒っぽい言い方をすれば、日記的小説で良いわけです。真意と信憑性はともかくもタレント本などに、この形式はよく見かけられます。

もう一度言いますが、物語をつくるという作業が、純粋に創作のみで完結するかといえば、はなはだ危いところがあります。実体験としての引き出し、それに加えて、今までに見て、聞いて、読んできたものからのインスパイアされた、つまりそれらに刺激を受けて創作意欲に火がついて作品ができることの方が多はずです。

また、100%リアルな経験を物語に出来るのでしょうか？そこに意識的にも無意識としても、なんらかの作家的操作が介入していないのでしょうか？

日本を代表する漫画家の手塚治虫も、多くの名作を誕生させ、優れた手塚ワールドを構築してきましたが、そのきっかけとなったのは、ウォルトディズニーのアニメーションだったわけです。ディズニーに刺激をうけて、新たなものを生み出したのです。晩年まで、手塚治虫の画風はディズニーに似ていました。本人もそれはわかっていたことで、その呪縛から抜け出すことのできないことが、悩みでもあったでしょう。しかし、わたしたちは、手塚治虫の作品をディズニーだと思って見ることはありません。確立された手塚ワールドが凌駕しているからです。手塚治虫の作品を、オリジナルではない、と批判する人はいないでしょう。いるとすると、かなりのひねくれ者でしょうか。

私は中学生のときに、現代国語の教科書に載っていた夏目漱石の「坊ちゃん」に感動して、活字の好きな少年になりました。現代国語の女性の先生が、夏目漱石が四国の松山、宮崎の延岡で教師をしていた時の経験がこの小説になったのだと、解説をされました。当時、夏目漱石の周りにはなんとユニークなキャラクターがそろっていたものかと、夏目漱石の人生経験に驚いたものでしたが、調べてみると夏目漱石は数学の教師として赴任したそうで、「坊ちゃん」の内容に照らし合わせれば、赤シャツの役となり、決して主人公ではないのです。創作の秘密を垣間見た気がしました。経験値は素材であり、題材ではないということです。しかし、我々は「坊ちゃん」の世界にとっぴりと浸かることができます。時代も世代も、ある意味常識や風習も違うところがある世界に、興奮して参加することができるのも、そこに舞台がビジュアルとして頭に、否、心に浮かぶからではないでしょうか。明治の文豪の作品をではありませんが、映画や漫画のように、映像として物語や場面が、はっきりと浮かんでくるのです。なんと革新的な出来事でしょうか！現代のようなコンピュータグラフィックスを多用した映像作品で、どんな夢のような世界でも我々に見せることができる時代ならともかくも、活字だけでこれほどの想像力をかきたてることができるなんて、驚異と言えるでしょう！それには、架空の物語や場面だとしても、現実の世界でのイメージの基礎工事がしっかりできていて、その上に構築された世界であることが必要なのでしょう。

高校生になって、同じく現代国語で出会ったのが「風立ちぬ」でした。堀辰雄の代表作とともに、堀辰雄という小説家のイメージを定着させた作品でもあります。「四季派・カルイサワ・微熱の詩」または「ステッキを持って、女言葉で話す作家」などと喩えられますが、前出した夏目漱石などの明治の文豪たちの次の世代として、萩原朔太郎や芥川龍之介などに影響を受けながらも、新しい昭和初期の作家像を見せてくれたひとりです。もっと言えば、戦後の太宰治、梶井基次郎へと続く橋渡しとなった作家でもあるでしょう。読感とすれば「生と死」を主題として、自分が体験した現実の生活を書いているように思えます。いえ、むしろ私小説の代表のように語られ、作家の体

験があたかも主題としてあつかわれているからこそ価値があると評価され、読者自身が体験しているかのような臨場感を与えてくれる作品です。だからこそ、今私たちの中にある、あの堀辰雄像が出来上がったのでしょう。事実、現実に堀辰雄は小説の中の出来事と同じように、婚約者を病気で亡くしています。「風立ちぬ」の中に登場する薄幸な少女「節子」のモデルが、堀辰雄の婚約者の「矢野綾子」であることは、堀辰雄ファンであれば誰でも知っています。八ヶ岳の麓にある富士見高原療養所(サナトリウム)での、ふたりの療養生活がまさに生と死を見つめた、美しい物語としてわたしたちを感動させるのです。その背景が「実話」であるという説得力が共感を呼び、当時流行していた完全治癒が難しかった結核が、それに拍車をかけるように読者の心に現実感を加味したのでしょう。

また、文体が堀辰雄が詩作からこの世界に入ったこともあり、散文詩的な言葉のリズムが心地よく読者に感じられたこともあるでしょう。それは交友関係に小説家より、詩人が多いことからわかります。堀辰雄は自分の体験した人生の大きなドラマを、散文詩的な小説形態でもって、崇高な文学へと昇華させた、ということになるのでしょうか？

それは大きな間違いだと思うのです。

話を戻しますが、いかに自分の人生を描いたとしても、それはノンフィクションではないのです。「小説」である限り、作家のフィルターを通したフィクションでなければならないのです。作文が上手な人であれば、自分のことを簡単に文章におこすことが出来るでしょう。もしそこに事実ドラマがあれば、知り合いの打ち明け話を聞く感覚で、共感し感動もするかもしれません。

しかし、それは「創作」ではありません。「テーマ」もなければ「想像」の介入する余地もありません。前出した例えをまた持ち出しますが、それは「生活者A」と「主人公A」が同一人物であるということになります。そこには「作家A」も「作家A」が創作した「解説者A」も存在しません。それでは創作活動しているとは言えないのではないのでしょうか。「作家A」は「生活者A」の経験をもとに創作活動をしているのです。「作家A」の文学的才

能も必要ですが、「生活者A」の日々の生活体験が重要です。そしてそれは刻々と変わっていく、否、積み上げられていく生活体験であるのです。昨年創作していたことが、今は出来ない、という事はよくあります。今日、出来ている事が来年に、同じ事ができるかといえば、実は出来ない事が多いのです。創作活動は今のこの瞬間が旬であり、そのことは創作活動に従事している人たちが必ず経験するジレンマのひとつでもあります。だからこそ、「自分の事を描くのは最期でいいんだよ」と言われた編集長の言葉に納得できないところもあるのです。

ましてや、漫画制作においては、小説と違って、最終的には絵を置いていかなければならないのです。しっかりとしたイメージが物語づくりの段階で出来上がっていないと、創作などできないのです。自分のことで言えば、場面設定や背景などが先に浮かび、それに合う物語づくりをすることもあります。「生活者なかはら」が見聞きしてきたことが、トリガーになって、作品が創作されるということです。漫画制作の場合は、それが際立っていると言えます。

小説を読んでいると、その物語の情景が手に取るようにわかる作品があります。活字の端々から映像のように場面が流れ出てくるかのようです。まさに映画や漫画と同じと言えます。このような作品をかける作家の頭の中を、あえて小説家ではありますが「漫画脳」の持ち主だと思うのです。そして、今回取り上げた堀辰雄は、優れた漫画脳を持っていたと確信しています。では、少し堀辰雄を解体してみたいと思います。

堀辰雄は1904年（明治39）に生まれ、1955年（昭和30年）に結核で没しています。19歳の頃から、詩人の萩原朔太郎や芥川龍之介、室生犀星などの明治の文豪たちから影響を受け、実際に彼らから文学指導も受けることによって、作家活動を始めることとなります。詩作に関わるが多かったため、詩集や詩の同人誌に発表することが多く、後の散文詩的文体はこの時期に養われたと思います。もともと堀家のお妾さんの子どもとして生まれ、のちに母親は別の男性と結婚をしたものの、堀家の姓を残したため堀辰雄は自

分の姓について悩むことにもなるのです。育ての父親は上条松吉という彫金師であり、心から辰雄をかわいがり大切に育てたと記録されています。東京の下町で、大正から昭和にかけて多感な時期を過ごした堀辰雄が、育った環境に悩みながら自己を見つめていた幼少時代が垣間見えてきます。

子どもの頃の記憶、つまりは幼児体験がもたらす刷り込みによる性格形成は、のちに大人になっても大きく影響することはご存じの通りです。堀辰雄についても例外ではなく、下町育ちの辰雄が憧れたのが13歳の時に知り合った明治大学教授・内海弘蔵の家族であり、長女の千江へのほのかな恋心だったのです。この体験は大きく堀辰雄を変えたと思われまます。異性への恋ということだけではなく、下町の彫金師の家庭で育ち、職人・芸人といった人たちの中で育った辰雄が、裕福な知識階級の内海家に憧れたのは自然なことだったと思うのです。その時の繊細な堀辰雄の心情と情景は、そのままのちの「麦藁帽子」（昭和7年9月初出、28歳）に反映されています。

では、堀辰雄は少年時代の淡き体験を美しくも私小説として昇華させたのでしょうか？「幼年時代」は確かに内海家との交流が下敷きとなっています。実体験をそのまま書くのではなく、自分の体験が創作として表現できる触媒が必要となってきます。かつて、手塚治虫は子どもの頃に見たウォルトディズニーに影響を受け、漫画家になった後でも、ひたすらアニメーションへの飽くなきこだわりを見せました。日本のアニメーションは劇場用のアニメーションに高い完成度をみせた「東映動画」が有名ですが、手塚治虫はそこで「西遊記」という作品に参加しています。極めてクオリティの高い、ウォルトディズニーに負けない作品として「西遊記」は完成しました。手塚治虫は日本のアニメーションの将来に確信を持ち、アニメーションプロダクションを設立し、やがて手塚治虫自身の手による多くのアニメーション作品が世の中に登場します。触媒としてのウォルトディズニーがいなければ、作画力があり、子どもの頃から漫画ばかり描いていた手塚治虫がこれほどまでにアニメーションを牽引する力はなかったと思われまます。そして、大学生の時にその「西遊記」を見て、日本のアニメーションに期待できると確信し、その世

界へ飛び込んだのが、スタジオジブリでやはり多くのアニメーションを制作し、日本のアニメーションを世界に知らしめた「宮崎駿」だったのです。このように、創作へむかわせるエネルギーには作家の才能、能力、経験値だけではなく、それを突き動かすやはりトリガーが必要となるのです。

堀辰雄は「麦藁帽子」を発表する3ヶ月前に、友人からレイモン ラジゲの「ドニーズ」を借りて読んでいます。この小説は地中海を舞台に幼い愛を描いた名作です。「麦藁帽子」も海岸の避暑地が舞台となっていて、非常にディテールが似ているのです。違う表現をすれば、ラジゲの小説の舞台と、堀辰雄の避暑地の体験が、和音を奏でて「麦藁帽子」は書かれたと言えるかもしれません。これはけっして盗作ではありません。そして私小説でもありません。まったくのゼロからの創作でもありません。

「生活者A」は少年期に体験した淡き恋物語を、「作家A」に提供します。それをもとに「作家A」は影響を受けたラジゲの小説を下敷きとして創作を開始します。「作家A」はその物語の中で「解説者A」に巧みにラジゲの舞台を日本の「生活者A」が提供した舞台に変換するように指示します。やがて、「主人公A」はその指示通りに物語を奏で、私小説風の創作小説が完成するのです。

この場合、難しいのは模倣ではなく、自己の体験がまずはあり、やがて何かのきっかけで触媒となる作品や素材と出会い、それが自己の体験と融合することで作品として定着するという部分です。つまり、まずは好きな小説があり、それを模倣して、自分に何も素材がないにもかかわらず、巧みに似た作品を書き上げる手段とは根本的に違うと言うことです。堀辰雄がラジゲの「ドニーズ」出会わなければ、「麦藁帽子」は書かれなかったわけで、ここに創作と言える根拠があるのです。

堀辰雄のこの時代の代表作で、もうひとつ有名なものは「聖家族」でしょう。堀辰雄に精通している読者であれば、あえて言えば裏事情ともいえる「聖家族」のできる経緯をご存じだと思います。「麦藁帽子」とは違う堀辰雄のナイーブな精神だからこそ完成度の高さを感じ、堀辰雄を有名作家に成長させた作



品です。実は「麦藁帽子」は昭和7年の初出ですが、モチーフは大正6年の堀辰雄13歳頃の青臭い経験がもととなっていると書きました。それが作品として世に出るまでには15年あまりかかっていることとなります。書きましたようにラジィゲと出会うことで、はじめて13歳の頃の経験をモチーフにすることが出来たのは間違いないでしょうが、もうひとつの理由として、少年期の青臭い経験を落ち着いて見つめることが出来るようになるまでには、それなりの歳月が必要だったとは言えないでしょうか。堀辰雄も30歳を前にして、やっとその時代を振り返ることが出来たのかもしれませんが。事実、奥様の堀多恵子さんにも、当初、若い頃を題材にした初期作品などを読むことを禁じていたとも聞いています。創作に関わる人間には理解出来る心情です。

わたしも自分の初期作品をほとんど開きません。すべての作品やコミックスなどは手元にありますし、当時の本原稿（原画）もほとんどが返却されてきています。が、しかしなかなか懐かしんで読むという心境にはなれないのが事実です。過去の成果として客観的に見る事が出来ないわけではありませんし、自分の当時の未熟さや画力のなさは、受け入れることが問題なくできるのです。ところが実は、述べてきているように、当時の作品の創作のきっかけには、そのモチーフとなった「生活者A」が存在します。「作家A」として当時の作品を受け止められても、「生活者A」として、その作品を取り巻く多くの当時の素材（思い出）と対面する勇気が恥ずかしくて出来ないのです。

「聖家族」に話を戻しましょう。「聖家族」とはご承知のとおり新約聖書でいうところの、ヨセフ、マリアそして、ベツレヘムの馬小屋のかいば桶で生まれたイエスの家族3人のことを言います。堀辰雄の初期作品は「ルーベンスの戯画」にしる「聖家族」にしる、やはり散文詩的な文体を象徴するような題目があげられています。堀辰雄のイメージにあった「四季派・カルイサワ・微熱の詩」の四季派のイメージは散文詩からきていますが、次のカルイサワはまぎれもなく長野県の軽井沢のことです。昔から避暑地として有名であった軽井沢は、堀辰雄の小説でも有名になりました。軽井沢は文人達の

別荘も多くあり、特別に堀辰雄だけが軽井沢に住んでいたわけではありませんが、その舞台として軽井沢をあつかった作家はあまり多くはありません。堀辰雄も自分の人生、いや小説家として大きな影響を与えられた土地になったからこそ、ここを舞台に物語を書かなければならなかったのです。つまりは「生活者A」が軽井沢で運命的な出会いと、衝撃的な事件に出会うことによって、「作家A」は軽井沢を舞台にするしかなかったといえます。

堀辰雄が20歳の時に室生犀星の紹介により、軽井沢に滞在中の芥川龍之介を訪ねることになります。軽井沢の「つるや旅館」（現存）での、まさに運命的な出会いです。その時に芥川龍之介は精神的な愛人と称した北欧文学翻訳家の片山広子とその娘の総子を伴っていました。堀辰雄の運命的な出会いは芥川龍之介だけではなく、片山総子と出会いも演出されていたのです。帝大生だった堀辰雄が文学の師である芥川龍之介のプラトニックな恋愛を間近に目撃したことは、やはり大きな衝撃として記憶されたことでしょう。そして、下町育ちの堀辰雄が娘の総子に惹かれたのも、聡明で上流育ちへの憧れも手伝っていたと思えるのです。それはかつての「麦藁帽子」の内海千江と同じように。この堀辰雄の純粋な憧れは「聖家族」の前に「ルーベンスの戯画」として1927年（昭和2年）23歳の時に発表されました。

やがて運命的な出会いは、衝撃的な事件によって大きく変わりました。芥川龍之介の自殺です。社会的にも大きな事件となった芥川龍之介の死は、当然のことながら堀辰雄にも大きな精神的な打撃を与えました。そして、そのショックを乗り越えるために堀辰雄がやらなければならなかったのは、「ルーベンスの戯画」とは違う、自分と芥川龍之介、片山母娘との関係を整理し、小説として定着させることでした。そのためのやはり触媒が必要だったので

堀辰雄の「聖家族」の冒頭は次のように始まります。

死はあたかも一つの季節を開いたかのやうだった。

死人の家への道には、自動車の混雑が次第に増加して行つた。そして

それは、その道幅が狭いために、各々の車は動いてゐる間よりも、停止してゐる間の方が長いくらゐにまでなつていた。

それは三月だつた。空気はまだ冷たかつたが、もうそんなに呼吸しにくくはなかつた。いつのまにか、もの好きな群衆がそれらの自動車を取り囲んで、そのなかの人達をよく見ようとしながら、硝子窓に鼻をくつつけた。それが硝子窓を白く曇らせた。そしてそのなかでは、その持主等が不安さうな、しかし舞踏會にでも行くときのやうな微笑を浮べて、彼等を見かへしてゐた。

……堀辰雄「聖家族」より

自動車が止つたので、フランソワは尋ねた。

「着いたのですか？」

ところが、やっとボルト・ドルレアンまでしか来ていなかった。自動車の行列が、発車する順を待っていた。群衆が脇に人垣を作っていた。ロバンソンでダンスをするようになってから、市の出入り口にたむろしている浮浪人や、モンルージュの住民たちが、パリのこの入口に来て、上流社会の人達をよく眺めるのだった。このずうずうしい野次馬どもは、人垣を作って自動車の窓ガラスに鼻を押しつけ、内の人をよく見ようとした。婦人たちはこの刑罰を、しいて面白そうな顔をして見ていた。

……ラジゲ「ドルジェル伯爵の舞踏会」江口清 訳

芥川龍之介と片山母娘との関係、そして芥川龍之介の突然の死、そしてその死から2年経った頃に、堀辰雄はラジゲの「ドルジェル伯爵の舞踏会」の中に、自分の重荷を整理する触媒を見つけたのではないのでしょうか。これなら、自分らしくあの出来事を乗り越えられる、そう判断した堀辰雄は「聖家族」を書き上げます。1930年（昭和5年）に「聖家族」は出版されました。

「聖家族」において芥川龍之介は作家の久鬼に、片山広子は細木夫人に、その娘の総子は絹子として配置されています。そして、堀辰雄自身は久鬼の

弟子である河野扁理として登場し、絹子に愛を告白するのです。極言すれば、当事者が読めばそれとわかる設定を恥ずかしげもなく堂々と物語にしまったことにあきれてしまうのです。当時、堀辰雄と片山総子の関係について、恋人同士と認識していた友人や文壇仲間が多かったようです。が、母親の片山広子はその関係を認めてはいませんでした。ともあれ、現代であればなんとスキャンダラスなことでしょう。しかし、堀辰雄があえて「聖家族」を世に出すには、それなりの決断があったに違いありません。それまでの散文詩的な堀辰雄文学を大きく変えていくためには、もっと甘美な私小説的な変革が堀辰雄には必要だったのではないのでしょうか。その変革を実行するには、作家にとって若干の背徳感も加味されたエクスタシーな行為にも、あえて手を染めなければならなかったのかもしれませんが。

漫画でも小説でも、創作物に関して言えば、結局のところ作家の虚構で作られた物語は、それ自身が一人歩きしてしまうものです。「生活者A」の実体験が素材となっている限り、「作家A」の虚構の世界はどこか輪郭線がぼやけてきて、現実の出来事と融合してしまう傾向にあります。言いかえれば「生活者A」と「作家A」との境界線が限りなく曖昧になるような仕掛けをすることです。それを読者まかせにしてしまうのか、それとも作家がそこまで緻密に計算して物語を作っているのか、堀辰雄の場合は明らかに後者であるようです。そして漫画制作が実は後者の手法を使っているのです。漫画家は結局のところ、コマ割という手法でイメージを具現化して、読者に見せなければ（読ませなければ）ならないのですから、どんなに空想的な、またはファンタジーな物語でも、その中に読者が入り込めば、それが現実だと感情移入できるように作品を作り込みます。これを漫画では「世界観の構築」と言います。昭和の初期に堀辰雄が試みた、「聖家族」をきっかけに新しいスタイルを模索していたのは、ひょっとしてこの「世界観の構築」だったのではないのでしょうか。そしてその「世界観の構築」には何度も記しているように、自分の体験とそれを物語まで昇華させてくれる触媒が必要なのです。やはり「無」からでは何も生まれません。

堀辰雄ファンには申し訳ないのですが、片山縊子と交際があった時代に、堀辰雄は「聖家族」のなかにも登場する踊り子のモデルとなった、浅草水族館2階にあったカジノ・フォリーの踊り子である梅園龍子とも交際がありました。人気作家と踊り子のスキャンダラスな情事は、現代ならフライデーものです。また、同じ時代に作家たちが集まる上野のレストラン三橋亭には、作家たちがブリュー・バードと呼んでいたウエイトレスがいて、堀辰雄と仲が良かったらしいのです。連れ出してはドライブに誘っていたということなので、ずいぶんとハイカラなデートではあります。「四季派・カルイサワ・微熱の詩」から想像する堀辰雄像とは少々違う輪郭線が見えてくるようです。当然、これから触れなければならない「風立ちぬ」という名作が登場するまでに、少なくとも3人の女性との関係があったと認めなければなりません。繊細でダンディーなイメージだけではなく、下町育ちの多少荒っぽい職人気質も、その生い立ちから理解しておかなければならないでしょう。しかしそれは、むしろ堀辰雄像をはっきりとデッサンできる試験紙でもあるのです。堀辰雄自身もそのことがよく分かっていたからこそ、むしろ実体験の中からその部分を慎重に排除して、精神の崇高な部分でのみに光を与えることができたのです。「聖家族」や「風立ちぬ」から時代背景やイデオロギーなど微塵も感じられないのは、そのせいでもあります。堀辰雄は経験していないことは書いていません。しかし、経験していても必要のないディテールは慎重に消し去っているのも確かなのです。

「作家A」は極めて丹念に「生活者A」の生活環境をぬぐい去り、「生活者A」から創作に必要な要素のみ抜き出させ、作家堀辰雄像をつくったと言えるのです。それは間違いなく「世界観の構築」の基本姿勢であるのですから。

堀辰雄は当時流行していた結核を発病します。19歳の時に肋膜炎を発病したと年表には記されていますが、すでに結核の初期症状だったのではとされています。24歳の時に肋膜炎が再発し、その後「聖家族」を執筆した後、咯血して病床に伏したのが、1930年（昭和5年）26歳の時でした。翌年、富士見高原療養所（サナトリウム）に入所し、退所後は静養のために再び軽井

沢に滞在することが多くなります。1933年、29歳の夏に軽井沢のつるや旅館で静養しながら執筆中、同じ病で静養のために、つるや旅館に泊まっていた矢野綾子と出会います。帰京後、同じ年にまだ高校生だった、詩人の立原道造とも出会い、心から信頼できる友人後輩を得ることになるのですが、矢野綾子も立原道造も自分より先に結核で亡くすとは、思いもしなかったでしょう。それほど結核は怖い病気であったのです。

矢野綾子は1934年（昭和9年）の9月に堀辰雄と婚約をして、翌年の12月には結核のため富士見高原療養所で死去しています。堀辰雄が矢野綾子と出会ってからわずか2年と数ヶ月の出来事でした。富士見高原療養所に矢野綾子が入所したのが1935年の7月なので、入所してから死去するまでわずか5ヶ月間という短い療養生活でした。伴って看病した堀辰雄が、その経験を小説にしたのが「風立ちぬ」です。これはみなさんもよくご存じだと思います。何度も映画化もされ、美しい愛の物語としてファンも多い小説です。また矢野綾子に対しての鎮魂歌（レクイエム）として書かれたことも有名です。

「風立ちぬ」はそれまでの触媒となるものがありません。それはこの出来事が堀辰雄にとってどれだけ大きな精神的ダメージを与えたかを物語っています。非常にシンプルに私小説としての文体を整えているように感じます。自分の体験を素材として昇華してくれる触媒が必要ないほど、衝撃が大きかったと思えるのです。堀辰雄は悲しみの中で矢野綾子への追悼の意味を込めてレクイエムを書いたのでしょうか。確かに人生の中で婚約者を失うことは、大きな心の傷となるでしょう。それにしても美しすぎます。美談すぎるのです。

「風立ちぬ」に決定的に欠けているものがあると感じます。これはわたしだけかもしれませんが、「風立ちぬ」には生活感がまったくないのです。死に直面した主人公と節子のふたりが、本当の「生」、生きるという実感を互いのおかれた境遇の中から見つけていく物語です。デッドエンドと思われたところから、あらためて生きるということを考える崇高な物語ですが、物語は自分たちを取り巻く、極狭い範囲での展開になっていて、私小説にありが

ちなアンカーとも言える生活感の裏付けがないのです。もともと前にも書いたように、他の作品においても必要以上の要素を持ち込まない堀辰雄なのですが、「風立ちぬ」においては神経質なくらいに排除されています。まったくきれいに生活感がぬぐい去られているのです。触媒を必要とせず、純粋に衝撃的だった婚約者との別れを描くためには、徹底した裏付け作業をしたバックボーンがなければ説得力を構築できない気がしたのです。ところが、一切ぬぐい去られているにもかかわらず、なぜ多くの読者が感動し、堀辰雄の代表作とまで評価されているのでしょうか。

では、あえて現実的なドラマチックな要素を検証してみましょう。堀辰雄も矢野綾子も結核を患っている関係にいます。同病相憐れむ心の働きは理解出来ます。堀辰雄はそれでも、結核とうまく付き合っていて、作家活動も続けています。しかし、矢野綾子に関しては実際はかなりの重症患者であったことが推測されます。そのようなふたりが婚約することに障壁はなかったのでしょうか。結核は今と違って死に至る病でした。

堀辰雄にもまだ存命の父親がいましたし、矢野綾子の家庭は父親が退役陸軍将校で、母親ははやくに亡くなっています。矢野綾子の父親は素直に婚約を承諾したのでしょうか。病身の娘を同じ病を持った、収入の安定しない作家に託す決断ができるのでしょうか。また、下町育ちの堀辰雄は年老いた父親を抱えて、介護の問題もあったと思われませんが、結核の嫁をもらうことにどれほどの決断が必要だったでしょう。もちろん義理堅い下町のことから、父親を含めてお世話になった人たちに、どのような報告をして、幾度相談が繰り返されたのでしょうか。

矢野綾子の父親も家柄から考えて、母親もいない境遇なのですから、一族の間に入り勇気のいる判断を迫られたと思われれます。それらについては「風立ちぬ」のなかでは一切語られていません。

日本は戦争へと転がり始める社会情勢だったでしょう。軍事色が濃くなっていく中で、まったくよその国のことのように富士見高原療養所で日々は、実に穏やかに過ぎていきます。

また、当時のサナトリウムはたいへんお金のかかる施設でもありました。資産家や裕福な家庭でないと入所できませんでした。長期入院による費用はばかにならなかつたと思われまふ。しかし、そのことについてもまったく語られていません。当時の堀辰雄はあまり多くの作品を執筆していませんし、書簡集などから推測すると、矢野綾子の看病で仕事が出来ないとぼやいたりすることもわかっています。堀辰雄はまた大量に印刷物として自分の作品を出版することを嫌い、美しい装丁の本を限定部数出版していたので、その少ない印税で看護していたとも思えません。療養費や生活費は矢野綾子の父親が面倒見ていたのでしょうか。堀辰雄の矢野綾子に対する愛情を疑うわけではありません。

しかし、多くの現実問題に直面していたのも確かです。それを素材に書くこともできたでしょう。それでは低俗的なお涙頂戴小説になってしまったかもしれません。堀辰雄はしたたかに、そして注意深く、繊細に、そのようなすべての俗世間的な要素はぬぐい去っているのです。完璧に消去しているのです。「風立ちぬ」を読むときに、それらの現実的な要素がないからといって、この物語が絵空事だとは思いません。むしろ研ぎ澄まされた緊張感が、凜としてふたりの愛情を際立たせているように思えるのです。死を目の前にして、精一杯生きようとするふたりに焦点を結ぶことが出来て、明確にそのテーマを感じることも出来ます。

堀辰雄は触媒なしで、実体験を精神的な高いレベルで演出することによって、極言までテーマを絞り込み、不要なものは一切捨て去るスタイルを確立したといえます。私小説のようではあるけれども、ノンフィクションではない、計算された創作があつてこそよりリアルな「世界観を構築」できたのです。

「風立ちぬ」が感動を呼び、愛されている理由は、物語の美しさばかりに目を奪われがちですが、実は素材をこうして必要最小限まで瘦身させることによって、読者は純粹にその世界を映像として思い浮かべることが出来るのです。そして、知らない間に、登場人物に自分を置き換えていても気づかないほど、繊細に巧みに、堀辰雄はその仕掛けを作つたのです。



故に純粹に何も無いところから創作されることは、ほとんど不可能であり、多少なりとも自分の引き出しの中にある、経験と体験からストックされたアーカイブスが創作のための大きな素材として必要だということがわかります。その百人百様の経験値が創作の根源であり、それを引き出すためのテンプレートがやはり必要となり、それは過去に見聞きしたことが、今現在自分の心を動かしている素材であるのです。素材は名画や名曲、漫画やアニメーション、小説であったり、実際に知り合いなどからの対話から聞いた話であったり、自分が経験したことではありませんが、忘れることの出来ない素材が触媒となりうるのです。

そして、やがて触媒なしでも、自分の引き出しから直接創作が出来るようになったときに、はじめて自分の創作スタイルにたどり着くのかもかもしれません。また、一生たどり着けないかもしれません。それは誰にも、本人にもわからないでしょう。

ひょっとすると、本当の天才とは、やはり「無」からすべてを生み出すことが出来るのかもかもしれませんが、わたしの周りで知る限り、今だかつてそのような作家には出会ったことがありません。

堀辰雄の文学世界を知りたくて、わたしも大学生の時から軽井沢に足を運んでいるひとりです。卒業して漫画家デビューしたのちも、ほぼ一年間六本辻につながる鳩山通りに、小さな別荘を借りて軽井沢生活をしたこともあります。今でも、機会がある毎に軽井沢に向いて、自分の中の軽井沢を更新しつづけているのです。2013年の8月末に、富士見高原病院（療養所跡の総合病院）に一棟だけ保存されていた、富士見高原療養所の旧病棟がついに老朽化に伴い解体され、新しい病棟になることを知らされました。慌てて最後のお別れに行ってきました。軽井沢にしろ、富士見高原療養所にしろ、作品世界の背景となった舞台を見ておくことは大切です。もちろん当時の堀辰雄の心情を追体験することは出来ませんが、堀辰雄の実体験が小説として昇華される過程を、そこに立って思いをはせることは出来ます。そのことは、少しでも今回述べてきた作家たちの創作のための頭の中を探る指針となればと

思うからです。堀辰雄のみならず小説家の多くは、漫画家の同じ「漫画脳」であると確信しているのです。

作家が作品を作るにおいて、小説家だろうが、漫画家だろうが、自分の経験がその作家が影響を受けた触媒によって化学変化をおこし、素晴らしい作品として完成をする、それを漫画脳と呼びたいのです。そして、けっして自分の引き出しの中の素材は、最期まで取っておくものではないと確信しているのです。



「風立ちぬ」の最終章を書き終えた、軽井沢の幸福の谷（左）  
富士見高原病院に保存されていた旧病棟（現解体）（右）

#### 参考文献

新潮社日本文学アルバム「堀辰雄」

「評伝 堀辰雄」 小川和佑 六興出版

「堀辰雄全集」筑摩書房

「ドルジェル伯爵の舞踏会」レイモン ラディゲ 江口清 訳 旺文社文庫

※文中では当時の堀辰雄らが呼称していた「ラジゲ」で表記しています。